

2014年度
大学院奨励研究員研究報告書

研究科委員長印
印

2015年3月31日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏名	林由貴子	印
----	------	---

指導教員

所属・職名	総合政策学部教授	
氏名	鎌田康男	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	ショーペンハウアー哲学における倫理学の基礎付け — 超越論的観念論との関係性において —
採用期間	2014年 4月 1日 ～ 2015年 3月 31日

研究科受付印	教務機構受付印

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	林由貴子	論文題目	共苦の超越論哲学的考察 —自己と他の同一性と差異性に着目して—		
	雑誌名	『ショーペンハウアー研究』 *3月31日現在編集委員会において査読中、4月前半に結果通知の予定です。		巻号	発行年月	掲載頁
				20	2015年6月	未定

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名		論文題目			
	書名			発行年月	頁	
					総頁：	
				担当箇所：		

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	日本ショーペンハウアー協会ハイブリッド研究会 研究発表（口頭）	開催地	京都/インターネット
題目	「ショーペンハウアー倫理学の超越論的基礎付け — 理性の超越論的働きを通して —」	発表年月日	2015年1月11日

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（3000字程度）

[1]研究テーマに関する進捗報告：

奨励研究員申請時には「ショーペンハウアーの自由意志の再考 ―カントとの比較において―」を研究課題として提出したが、「ショーペンハウアー哲学における倫理学の基礎付け―超越論的観念論との関係性において―」と、テーマを変更した。以下その経緯を説明する。

2014年度に博士論文のサーベイ論文を執筆するにあたり、国内外のショーペンハウアーの先行研究を調査する過程で、まだ詳細に論じられていない問題、ことに倫理学と理論哲学との関係について未解決の課題が多く残されていることが明らかとなった。中でも、ショーペンハウアー哲学の基本概念である「意志」を「形而上学的実体」と誤解し、あらゆる個別的なものをその唯一の「意志」から生じるとする流出論的説明は、ショーペンハウアー哲学全体を「超越論的」ではなく「超越的」に理解（誤解）させかねない重大な問題である。すでに理論哲学においては超越論的解釈が進められているが、倫理学におけるそれは、今後の課題である。そのような背景から、比較研究に先立ち、ショーペンハウアー哲学内部において整合的な倫理学の基礎付けを行うことが重要であるため、テーマを変更することとなった。

なお本来テーマとしていた「自由意志」の問題も倫理学に関わる問題であることは変わりないが、博士論文において中心的に取り扱うことはしない。なぜなら上述したように、ショーペンハウアーの倫理学研究においては、大きな解釈枠のレベルで議論すべき点が数多く残っているからである。よって、まずはショーペンハウアーの側から見た「カント哲学への評価」を確定することが先決である。

ショーペンハウアー自身はカントの超越論的観念論を高く評価し、自分こそがカント哲学の真の後継者であると公言していた。しかしこと倫理学においてはカントに強く反発する姿勢を見せている。一方でカントを高く評価し、他方で強く反発し批判するという、複雑なショーペンハウアーの真意を明らかにすること、すなわちショーペンハウアーによるカント哲学の受容および評価を明らかにすることで、カントとの対比の中でショーペンハウアー哲学の特徴が浮き彫りになる。研究課題の副題「超越論的観念論との関係性において」には、そのようなショーペンハウアーにおけるカント哲学の受容を念頭に置いて、ショーペンハウアーの倫理学の再構築を試みるという意味が込められている。

以上、新たな研究テーマに関する進捗報告を行った。以下において、具体的な内容についての報告を述べる。

[2-1]研究内容に関する進捗報告：

以下、研究内容に関する進捗報告（2-1）と、具体的な博士論文の進捗状況（2-2）に分けて進捗報告を行う。まずは新たな研究テーマに沿って、研究内容の概要を説明していきたい。これまでのショーペンハウアー研究においては、ショーペンハウアーの倫理学が、カントのそれと比較して、「非理性的」であり、感情的な倫理学であると考えられてきた。しかし、ショーペンハウアー自身の言と丁寧に照らし合わせていけば、そのような「非理性的」、あるいは「感情的＝非理論的」というレッテルは、彼自身が構想した倫理学像にはそぐわないものである。そこで本研究においては、ショーペンハウアーが本来意図したことを、諸著作を通じて明らかにする形で、理論的な見地より倫理学の全体像を再構成することを試みる。ことに現代において所謂「倫理学」とは、道徳的行為の基準を定め、その基準に照らした行為を推奨するものであるが、ショーペンハウアーの倫理学はそのように「行為を示唆する」、という意味での「実践的」な倫理学とは異なる。ショーペンハウアー自身は、カント倫理学を「行為を示唆する実践的な倫理学」とし、自らの倫理学をそれと分けた。（なお、そのようなカントへの評価が整合的であるかどうかは、別に議論されるべきものである。）

ショーペンハウアーによれば、彼の倫理学は「理論的」であり、他の哲学領域、すなわち認識論、自然哲学、美学との相互関係においても矛盾なく位置づけられる。そのようにショーペンハウアーの倫理学の特徴を確認し、理論哲学としての倫理学を明らかにするという、中心課題を見出すことができた。これまでショーペンハウアーの倫理学を理論的に位置づける先行研究は国際的にも少ない。だが日本では、僅かながらも理論哲学と倫理学を結びつける先行研究が存在していることから、本領域においては日本が先進的であり、世界を牽引する役割を担っている。博士論文においても、これらの先行研究を十分に踏まえた上で、世界のショーペンハウアー研究で未だなされていない、理論哲学と倫理学の相互関係に関する研究を引き続き進めていく。

[2-2]博士論文進捗状況：

以上、研究内容の全体像について述べたが、以下においては博士論文の構成に沿いつつ、現在執筆中の博士論文の中心課題について概説する。

博士論文の構成は現時点で以下の通りである。

①先行研究

②ショーペンハウアーの超越論哲学の枠組みの提示

③ショーペンハウアー倫理学の特徴

④ショーペンハウアー倫理学の超越論的基礎づけ

これまでに、①「先行研究」については、国内外のショーペンハウアー倫理学に関する先行研究分析を2014年11月にサーベイ論文として提出した。

また②③④の概観については、2015年1月20日の博士論文概要の公聴会にて発表した。博士論文概要審査に合格したため、2015年3月末に満期退学し、2015年度は研究員として総合政策研究科に在籍し博士論文を執筆する。

現在は④「ショーペンハウアーの倫理学の超越論的基礎づけ」について、ショーペンハウアーによるカントの超越論哲学の批判的受容を手掛かりとして研究を進めている。最新の論文（上記研究発表状況（1）参照）では、ショーペンハウアー倫理学の中心テーマの一つである「共苦（ミットライト）」に焦点を当て、超越論的に共苦を考察してきた。以下、論文の最も重要な点を概説する。

「共苦」という事態は、ショーペンハウアーにおいては「神秘」的でありながらも、誰にでも身近な「事実」として語られており、また「共苦」は「自己と他の同一化」と「自己と他の差異性」という全く異なる意味において語られている。このような一見矛盾する「共苦」の叙述を検討すると、倫理学が経験的次元からのみ語られるのではなく、超越論的な文脈で基礎づけられていることが明らかとなる。すなわち、「共苦」の問題には「他」に関する超越論的理論が先行していると仮定するとき初めて、上述のような矛盾は解消する。ショーペンハウアーの認識論における表象に関する根本命題、すなわち「表象の根本形式としての主観と客観」の理論を倫理学に当てはめると、「他」は、「根拠律の根」である表象の形式から生じることが明らかとなる。なお、倫理学の領域に関する自己と他の関係は、認識論を論じたショーペンハウアーの学位論文『充足根拠律の四方向に分岐した根について』の第一類、第四類において現れている。これらの議論を通して、博士論文本論の目的である、ショーペンハウアーの倫理学を超越論的観念性の理論哲学の内に位置づけることの妥当性が示されたと考える。以上が最新の研究の進捗報告である。

[3]今後の課題：

今後は表象論（プラトンのアイデア）および意志論（意志のアナロジー）の両側面から、「共苦」の問題と倫理学との関係について考察を進める予定である。2015年度中に上述の博士論文の構成の①②③④すべてを進める予定である。詳細な流れとしては、博士論文の議論の中心となる④を確定したのち、①②③について博士論文全体の整合性の中で調整し、最終的に提出に向けて加筆修正をする。2015年秋学期に博士論文の提出を目指す。

以上